

---

# オレと貴女と・・・

水城由羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレと貴女と・・・

### 【Zコード】

Z0610E

### 【作者名】

水城由羅

### 【あらすじ】

小学6年でリトルリーグ所属の雲雀翔はいつも練習を見に来る大學生の菊川華に恋をし・・・

野球の練習を見に来る優しい目をした少し年上の女人。  
俺はそんな彼女に恋をした。

「おい、また来てるぜ。あの人」

友達に声をかけられフェンスの方を見る。

何日か前から見に来ている女人。ぱつと見大学生くらいかな?大人っぽくて優しそうな雰囲気の人。

んでもって俺の一目ぼれだつた。

「このチームに弟でもいるのかな?」

弟ねえ・・・。ここには少年野球チームで俺はその中でキャプテンと

サードのポジションを務める小学6年生。

「翔<sup>ショウ</sup>聞いてくれねえ?」

「はあ!?」

「お前だけが頼りだ!!頼むぜ!キャプテン!」

俺の肩をポンポンと叩くと俺の答えを聞かずに満面の笑みで去つていつてしまつた。

ふざけんなつつーの!!

チームメイトに頼まれ俺はしぶしぶ彼女のいる方向に走つた。

頼まれたら断れないこの性格どうかと思うんだよな、我ながら・・・。

彼女のところまで行くと俺のことをじっと見る。

近くで見るとすごい美人だと思った。

「あの・・・」

「何かな?」

フェンス越しに俺の目線に合わせて話してくれる。

「このチームに弟さんが・・・いるんですか?」

彼女は首を横に振った。

「違うの。前にここを通りかかったときに野球頑張ってる子達がいるなって思ったから。・・・ダメだったかな?やっぱり迷惑だつたかな?」

悲しげな顔をされ首を傾げられる。

そんな悲しい顔なんてさせたくない!

俺は必死で首を横に振った。

「全然迷惑なんかじゃないです!大歓迎です!」

彼女は優しい笑顔を向けてくれた。

「ありがとう。私は菊川華よろしくね。」

「お・・・俺は雲雀翔です!」

「翔君ね。よろしくね。」

優しい笑顔を向けてくれる。

やっぱり綺麗だ・・・。

それから華さんは毎週のように練習の時には顔を出してくれた。

華さんは体育大の1年生でスポーツドクターを目指しているらしい。

高校生まで野球部のマネージャーをしていたらしく俺たちにアドバイスをくれた。

華さんのアドバイス、怪我をしたときの手当は的確で、人当たりも良かつたので俺たちの親や監督にすぐに気に入られた。

「菊川さん良ければここマネージャーになつてくれないかな?」ある日練習の終わった午後、監督が華さんに声をかけた。

「え。私・・・ですか?」

驚き困ったような表情をして俺たちを見た。

「学校が忙しいのなら仕方ないけど・・・無理にとは言わないよ。」

監督の言葉に少し考え込んでいた。

俺は固唾を呑んで見守った。華さんはマネージャーになつて欲し

かつた。

「学校のほうは大丈夫なんですけど、私なんかでようしいんでしょうか？」

「大歓迎だよ。皆もそうした。」

「私でいいの？」

華さんの言葉に皆わっと喜んだ。

それを見て華さんも嬉しそうな顔を浮かべた。

皆から少し離れてみていた俺も笑みをこぼした。

ふと顔をあげると華さんと目が合った。華さんはさつき以上の微笑を俺に向けてくれた。

力アツと赤くなつて、余裕がなくなる。少しだけ皆と違つて自惚れてもいいのかな？

俺がキヤプテンなせいもあってマネージャーになつた華さんと喋る機会がぐつと増えた。

降り積もつていく華さんへ想い。

伝えたいのに伝えられない。

俺が、華さんと同じ年なら、年上なら……伝えられるのかな？

練習試合の帰り、夕暮れの道路。周りには誰もいなくて。

「華さん！良ければ、来週の日曜、港の公園へ行きませんか？」

思い切つたデートの誘い。

「いいよ。今日勝つたしね！」優美にアイスクリームおじちゃんによー！」

華さんからしてみればデートなんかじゃないかもしれない。

ただ、小学生と一緒にどこかへ遊びに行くっていう程度なのかもしれない。

誘いに乗つてくれたのは嬉しいけど、おじちゃん……か。俺、子供だからな。

追いつくことのない年の差。

俺は何処まで行つても華さんにとっては子供なんですか？待ちに待つたデートの日。俺は約束の時間より30分も早く来てしまった。

しかもなかなか眠れなかつたし、なんだか落ち着かない。

「翔君！」

白いワンピースを翻して走つてくる華さんはいつも以上に綺麗で思わず見惚れてしまつた。

「遅れてごめんね！待たせちゃつたかな？」

公園の時計を見るとまだ約束の10分前。

「い・・・いえ！今着たばかりです。」

俺が真つ赤になつて答えると華さんはクスリと笑う。

「そつか、じゃあ少し歩こうか。」

手を握られ、引かれるように歩き出す。

まだ、華さんの手のほうが大きい。

俺と華さんは周りから見たらどう見えるのだろうか。

恋人同士・・・には見えないだろうな。

やつぱり姉弟？それは嫌だなあ。

俺は、この手のようすに守られてばかりなのか？

守ることはできないのか？

そつと、華さんを見上げるといつもと変わらない笑顔のはずなのに

何か違和感を感じた。

何處か悲しそうな。

「華さん・・・」

「どうしたの？あ、ほら力モメだよー！ー！」

海にいるかもめを見てはしゃぐ。

そのはしゃぐ姿も何処か無理があつた。

「お弁当も作つてきたんだよ！」

ベンチに座つて出されたお弁当はとても美味しそうだつた。

「味は自信ないんだけどね。」

美味しそうなおにぎり、卵焼き、から揚げなどなど。

華さんが作ったんだから不味いわけないじゃんか。

「いただきます。」

おにぎりを一つ掘んで口に入る。

「おこしいです！！」

「そう？おにぎりなんてただご飯握つただけなんだけど。」

照れ笑いしながらも華さんもおにぎりを手に取った。

華さんの笑顔守りたいよ。

俺はまだまだ子供で、年下だナビ・・・

そう思つて・・・良いよね。

お皿を食べてまた少し散歩をする。

華さんは両手をパンツと叩くと嬉しそうに俺のほうを向いた。

「そうだ、翔君にアイス奢るつて約束したよね！お勧めのアイスク  
リーム屋さんあそこににあるから買つてきてあげる。何が食べたい？」

「えつとチラリコノミスト。」

「オッケー！」

アイス屋に駆け出す華さん。

その背中が小さく見える。

今日の華さん無理してる。

何かあつたのかな？

俺が聞いても答えてくれるかな？

「おまたせ！はい。アイス！」

「ありがとう」れこます。」

「いえいえ。」

俺が座つていた横に腰を下ろした。

「翔君は中学行つても野球するの？」

「え、はい。俺は野球大好きですから。ビリオでやれるかチャレン  
ジしてみたいんです。」

「なんだ。」

少し悲しそうな顔をする。なんで、俺はそんな顔をさせたくないの

に。

俺、子供で相手にされないのかもしないけど。

「翔君にこんなこと言うのも何なんだぜ? 私高校のときから付き合つてた人いたんだ。」

長い髪を耳にかけ俯いたまま、ぽつりぽつり話し出す。

「その人も野球部だつたんだ。大学入つたらお互い会う時間なくなつちゃつて向こうに好きな人ができてね。先週別れちゃつた。その頃なんだよ、翔君たちに会つたの。」

華さんは力無く笑顔を作る。

「泣いても良いんですよ。」

俺の言葉に驚いたように顔を上げた。

俺自身も驚いていた。

こんな言葉が出るなんて。

けど、こんな痛々しく笑う華さんをこれ以上見ていられなかつた。

「無理して・・・笑わないでください。俺の前で強がらないでください。」

ゆつくりはつきり華さんの目を見て言った。

「ごめんね。」

華さんはそつと俺の肩に頭を乗せる。

そして肩を静かに震わせ涙を流した。

俺はどうしたらいいかわからなくて少し慌てたけど、頑張つてそつと肩を抱いた。

「私ね・・・諦めてるんだよ。あの人の一番は私じゃないってわかつてるよ。」

「大丈夫です。華さんを一番だと想つてくれる人は必ず現れますから。」

「現れるかな?」

涙で濡れた顔で俺を見る。

俺がそうです。

俺の一番は華さんです。

初めて会ったあの口から。  
変わることはありません。

「俺じゃダメですか?」

無意識に俺の口から出ていた。

俺は驚き口元を押さえる。

華さんも田を丸くしていた。

「翔……君?」

俺は後戻りができないと意を決するとガシガシと頭を搔き華さんに向き直った。

心臓がざきざきしている。

「あの……俺じゃダメですか? 俺は華さんよりも年下でまだまだ子供で、至らない点も沢山あるし、華さんの彼氏に比べたらホントにガキですけど、華さんを好きだつて言つ気持ちは誰にも負けません!」

今の俺きっと真っ赤だ。

だつせえ……。

華さんもみるみる赤くなり慌てた。

「ショッ……翔君! ? 私なの! ? きっと良い人が。それに、私はまだ……」

「華さん以外考えられません! それに友達からでもいいです! 俺、頑張りますから!」

断固として言い切る。

「俺じゃダメですか?」

華さんに近づいてもう一度きく。

「ダメじゃ……ないよ? 私6つも年上だから……。」

「そんなこと言つたら俺は華さんよりも6つも年下とこわいことになりますがダメじゃないんですか?」

「別に……」

「なら問題無しです。」「俺の勝ち。

俺はにこりと笑った。

「これからよろしくお願ひしますね。」「

「・・・ハイ」

まだ、忘れられないのなら俺が俺なりの方法で忘れさせます。

6年後

俺は、野球を続け、プロから指名を受けた。  
そして晴れてプロ選手の仲間入り。

「翔君！」

あの日のように俺が告白をした場所で華さんとの待ち合わせ。  
俺はまだ高校3年生だが、華さんはスポーツドクターになった。  
美人で優しくて大人気。

俺の自慢の彼女だ。

「プロ決定おめでとう。」「

「どうもっす！」「

俺たちは手をつないで歩き出す。

あの頃は、華さんのほうが大きかった手。

今では俺のほうが華さんの手を包むくらい大きい。それが手を繋ぐ度に嬉しくなる。

「卒業まで気を抜かないでね、勉強。」「

華さんのいたずらっ子みたいな微笑。俺が弱いの知つて使うんだよな。

「う・・・」

勉強は苦手。まあ、華さんがテスト前とか教えてくれて何とかここまで乗り切つてきただけど。

「まあ、頑張らせていただきます。」「

棒読みで溜息をつく。

「うん、頑張って。」「

そして、今日はもう一つ頑張ることがあった。

俺は立ち止まる。華さんも立ち止まり俺に向いた。

「翔君？」

俺はあるときみたいに華さんを真っ直ぐ見つめた。

「俺……18になりました。プロも決まりました。何処までいるかわからないけどこれからもずっと傍で見ててほしいんです。だから、俺と……結婚してくれませんか？」

俺の言葉に華さんは目を見開く。

そして、涙を流した。

「え……ちよ……俺じゃダメですか！？」

俺があろおろしてると華さんは思い切り首を横に振った。

「ありがとう、嬉しい。」

泣きながら美しく笑つ華さんが愛おしくて俺は思わず抱きしめてた。

「ありがとうございます。」

「ああああ……もう6年経つてるし結婚するんだから、敬語とさん付け禁止ね。」

見上げて微笑まれ俺は嬉しくてもうときつく抱きしめた。

「はい……あ、いや、ああ、幸せにするから。華。」

俺は6つも年下で至らないトコも沢山あるかもしないけれど貴方が、一番好きで守りたい、幸せにしたい。

それは、あの日の出会いからずっと変わらず思つてきた事。

終わり

(後書き)

サイトであつたお題から書かせていただきました。  
結構お気に入りです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0610e/>

---

オレと貴女と・・・

2011年1月25日04時07分発行